

# イエダニ及びミジンイレコダニを検出した各事例について

川内 良介・大隈 英子・塩津 幸恵・菅原 誠

Each detected case of *O.bacoti* and *C.abscondita*.

Ryosuke KAWAUCHI, Eiko OKUMA, Sachie SIOTSU and Makoto SUGAHARA

平成6年1月に、中央保健所に苦情相談として虫体の持ち込みがあり、保健所より当試験書に虫体の同定依頼があった。同定の結果、虫体はイエダニ (*O.bacoti*) であった。イエダニが捕獲された場所は、市内のテナントビルであり、虫体を持参した当人によると、最近周辺のビルが割と広範囲に取り壊された後、ビル内にネズミの数が増加したと言う事であった。また、このテナントビル自体も数年前に外壁の張り替え工事を実施しており、外壁の間の隙間にネズミが生息している可能性が示唆された。保健所ではダニの駆除と同時にネズミの駆除を指導しているが、その後このテナントビルからの苦情相談はない。

また平成5年8月に城南保健所より依頼のあった苦情相談に於いては、日本に於いてはあまり報告例のないミジンイレコダニ (*C.abscondita*) が多数検出された。苦情の内容としては虫刺されがひどいと言うものであったが、ミジンイレコダニ自体は直接に人体に危害を加えるダニではなく、虫刺されの原因は、同時に検出されたツメダニ科によるものではないかと考えられた。

Key words : イエダニ *O.bacoti*, ササラダニ類 *Oribatei*, ミジンイレコダニ *C.abscondita*  
ヤドリダニ上科 *Parasitoidea*, 室内塵 house dust, テナントビル

## I はじめに

大都市等における衛生状態の向上に伴い、積極的に人を刺咬し皮膚炎等を誘発するとされる、節足動物による人的被害は減少の傾向にある。それに代わって、ハウスダスト等を原因とするアトピー性皮膚炎等の増加が社会問題となっているが、吸血性の節足動物による直接的な人的被害について無関心でいて良いかと言うと、決してそうだとは言えない。それは、豊富な食料事情にある現在の日本に於いては、飲食店街から出される大量の残飯を餌としているネズミや野鳥が多数いるということである。これらネズミや野鳥の増加は当然それらに寄生する節足動物類の増加をも考える必要性が生じる。ダニ類について言えば、ネズミにはイエダニが、また野鳥にはトリサシダニが寄生する。これら宿主の増加は当然それに寄生する種類の増加も考慮しなければならない。

今回我々は、平成5年度中に提出のあった検査依頼の中で、積極的に人を刺咬し吸血を行うイエダニが検出された事例を経験したのでその背景、並びに既略について述べたい。又同年度に検出された、非常に希なダニ1種についても、併せて言及する。

イエダニはヤドリダニ上科 (*Parasitoidea*) オオサシダニ科 (*Macronyssidae*) イエダニ属 (*Ornithonyssus*) に属し、同属のダニとしてトリサシダニがいる。両ダニの本来の宿主は、イエダニがクマネズミ属、トリサシダニは野鳥や家禽類であるが、大量発生した場合や本来の宿主がいなくなった場合等には、吸血の為人に害を及ぼす。又吸血による痒様感のみがこれらダニの与える被害ではない。イエダニは実験的であるにせよケッチアを媒介し得るし、トリサシダニはセントルイス脳炎ウイルスの媒介能を有している。即ち疾患の蔓延を防止する為にも、それらの本来宿主から駆除する必要性があるダニ類である<sup>1) 2)</sup>。

一方ミジンイレコダニは、ササラダニ亜目 (*Oribatida*) フシイレコダニ上科 (*Protoplophoroidea*) フシイレコダニ科 (*Protoplophoridae*) に属し、我国では青木らにより1980年に報告されたのが最初である。南米のパナマ原産で、その後各国よりの報国がある。死んだ植物を栄養源としており、人畜にも植物にも無害とのことであるが日本に於いてこれだけ多量に出現するのは珍しい。

## II 事例概要及び検査結果

イエダニが検出された事例は、本年1月上旬中央保健所に苦情相談として来所されたものである。以下要点をまとめる。

- ① 主訴は強い痒みであり、虫刺されの跡（偏平丘疹状）を対応に出た保健所職員が確認している。（この時何匹かの虫体を持参しており、同定はその虫体により実施した）
- ② 場所は市内のテナントビルであり、そこに入居している、ある店舗の経営者が管理人に苦情を申し出たものである。他の店舗入居者からは苦情の申し出は無かった。
- ③ このテナントビルは数年前に外壁の張り替えを行っており、またそれと前後して近くの飲食店が、割と広範に取り壊されている。その後ビル内に於いてネズミの数が増加しているのをビルの入居者が確認しており、飲食店に巣くっていたネズミが移り住んで来た事が想像される。また古い外壁と新しい外壁の僅かな隙間が、生息域となっている可能性がたかい。
- ④ 保健所の対応として、ダニおよびその宿主であるネズミの駆除を指導した。その後、このテナントビルからの苦情相談は無い。

以下に、来所された後保健所より出向し採取されてきた検体について、ビル全体の環境、および

個々の検体についての採取場所の環境、検査結果について記す。

- ① 建物は築後30年のテナントビルである。  
（地上3階、地下1階）
- ② 昼間は店舗として営業しており、夜間は無人となる。
- ③ ペットは飼っていない。

### 検体1

- ① 採取場所は合板にクロス張りのしてあるトイレへ続く壁である。
- ② 部屋は洋室であり、土足で出入りしている。
- ③ 室内の日当りは悪く湿度は多い。
- ④ 採取面積は3㎡で5分間吸引。

### 検体2

- ① 採取場所はトイレへ続く板床である。
- ② 採取面積は2㎡で6分間吸引。  
（他の環境は検体1に同じ）

ミジンイレコダニが検出された事例は、苦情相談として城南保健所に来所されたものである。具体的な症状としては、夫婦共に全身に虫刺されがひどいということであるが、依頼人の環境に関し以下に要点をまとめる。

- ① 住居は築後18年の木造一戸建ての平屋である。
- ② 家族数は3人で小学生以下の子供はいない。
- ③ 毎日、半日以上家が無人化する。
- ④ ペットは飼っていない。

提出された検体（フィルター）数は2個である。以下

### 検査結果（検体1）

ヤケヒョウヒダニ	7 exs
イエササラダニ	2 exs
ホコリダニ科の一種	2 exs
中気門亜目の若虫 (家ダニ若虫と考えられる)	10 exs
イエダニ	26 exs

### 検査結果（検体2）

ヤケヒョウヒダニ	6 exs
イエササラダニ	1 exs
ホコリダニ科の一種	1 exs
中気門亜目の若虫 (イエダニ若虫と考えられる)	14 exs
イエダニ	17 exs

### 検査結果（検体3）

ミジンイレコダニ	1382 exs
カザリヒワダニ	78 exs
イエマルニクダニ	63 exs
イエササラダニ	47 exs
ケナガコナダニ	19 exs
コナヒョウヒダニ	17 exs
ホソツメダニ	15 exs
ホコリダニ科の一種	4 exs
テングダニ科の一種	2 exs
種不明：中気門亜目	7 exs

### 検査結果（検体4）

ミジンイレコダニ	58 exs
ケナガコナダニ	25 exs
カザリヒワダニ	8 exs
イエササラダニ	5 exs
イエマルニクダニ	4 exs
コナヒョウヒダニ	3 exs
ヤケヒョウヒダニ	1 exs
ホソツメダニ	1 exs
ホコリダニ科の一種	11 exs
テングダニ科の一種	3 exs

に各検体が採取された環境、及び結果について記する。

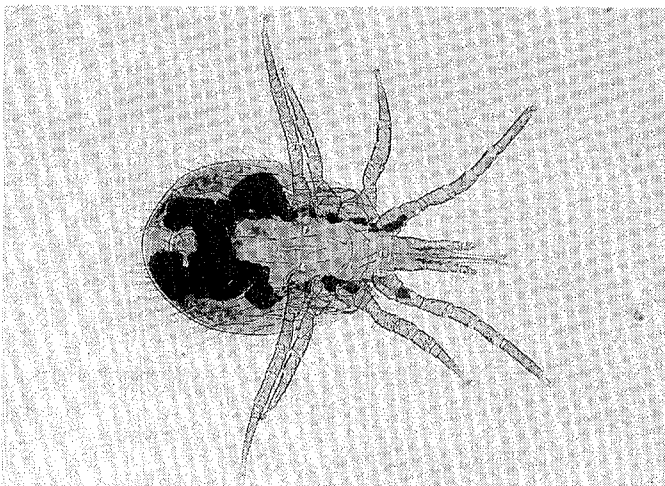
#### 検体 3

- ① 部屋は和室で、寝室として使用している。
- ② 採取場所は天然の畳であり、水分含有量は 11 % であった。これは水分含有量が多い方ではない。
- ③ 部屋は南向きであり、日当たりは良く、湿度は少ない。室内の使用状況は常時。
- ④ 採取面積は 1.55 m<sup>2</sup> で採取時間は 5 分。

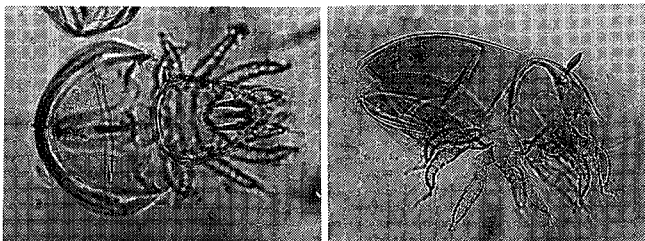
#### 検体 4

- ① 部屋は和室で、客間として使用している。
- ② 採取場所は天然の畳であり、水分含有量は 12 % であった。
- ③ 部屋は南向きであり、日当たりは良く、湿度は少ない。室内の使用状況は常時。
- ④ 採取面積は 1.55 m<sup>2</sup> で採取時間は 5 分。

以下に各事例で採取されたイエダニ、並びにミジンイレコダニの写真を掲載する。



吸血後のイエダニ像 40倍



ミジンイレコダニ 400倍

### III まとめ及び考察

イエダニが検出された事例に於いて、ダニを媒介したと考えられるネズミについてであるが、事例概要の項でも述べた様に、近くのビルの取り壊しがあった後にネズミの増加をみている。このことは、現代のネズミの生息域が従来とは異なってきていることが考えられる。即ち以前はその多くが家屋を生息域としたのであるが、飲食店街の増加と、そこから出される大量の残飯類をエサとして都会のビル内に巣くうようになったと考えられる。このような状況は今後とも継続すると思われ、区画整理やビルの取り壊し等が、割と広範囲に実施されたりした場合、同様な事が発生する可能性を秘めている。このことはイエダニだけではなく、野鳥や家禽類を寄生対象とするトリサシダニにも同様な事が考えられる。

次にミジンイレコダニについてだが、このダニ自体は冒頭で述べた様に、死んだ植物を栄養源としている為に、衛生害虫としての意義は少ないと思われる。この事例でも、実際に人体を刺咬していた可能性があるのはホソツメダニだろうと考えられる。問題はミジンイレコダニという日本に於いては珍しい部類にはいるダニが、何故このように大量発生したかであろう。その背景について、もっと深く探る必要があると考えるが、現在の時点に於いてはそれは不可能である。今後、さらに例数を重ねる事により、その外枠が少しでも見えてくれば、と期待している。

謝辞：検体の収集に関して各保健所衛生課の諸兄に多大なる御協力を頂きました。厚く御礼申し上げます。又ミジンイレコダニの同定に関しまして、依頼を快くお引き受け下さいました、横浜国立大学環境科学研究センター土壌環境生物学研究室の青木淳一教授、並びに原田洋先生に厚く御礼申し上げます。

### 文 献

- 1) 高田伸弘：病原ダニ類図譜、P 164 ~ 165 金芳堂、1990
- 2) 森谷清樹：家の中のダニ、P 37 ~ P 39 裳華房、1991